慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Walter PaterとMeditatio Mortis
Sub Title	Walter Pater and "Meditatio Mortis"
Author	河口, 真一(Kawaguchi, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.323(24)- 331(16)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0331

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Walter Pater と Medetatio Mortis

河　口　真　一

Walter Horatio Pater は，1839年8月4日，Thames の北岸 Shadwell で，Richard Glode Pater の次男として生れた。そしてなくなったのは，1894年7月30日であったから，その生涯は，満55年に5日満たなかったわけである。

その一生はかように短かかったけれど，彼は平素，とくに病身というのではなかった。——いわゆる蒲柳の質などであったら，とてもああいう数多くの労作は発表できなかったはずである。現に，なくなった年の春には，あんまり嬉しくもなかったらしいが，L. L. D. の名誉学位をえるため，Oxford から Glasgow 大学まで出かけたくらいである。ところが，夏になって，ほとんど生涯において始めてという大患にかかって倒れた。——病気は発熱をともなうリウマチス性のものであった。一時快方にむかったが，Pascal 論などを書き続けるため少し無理したので，肋膜炎を併発し，その結果健康とみに衰え，ついに月曜日の朝10時頃，小康をえて二階からおりてきたとたん，心臓まひにおそわれて死んだ。

かように Pater の死について語りはじめたのは，Pater ぐらい幼少の頃から，諸行の無常を痛感し，いわゆる Meditatio Mortis（死の瞑想）にふけり，いかにして死を迎えるかについて，思いわずらったものはなかったからである。

Pater が改題「文芸復興論集」（もとの "Studies in the History of the Renaissance" に対する "The Renaissance; Studies in Art and Poetry"）を公にした翌年——1878年に発表した彼の最初の小説 "The Child in the House" の motif は，「死の瞑想」といって過言ではないであろう。

主人公の少年 Florian Deleal は，

古風な，低い腰板が，部屋部屋のまわりに張りめぐらされ，それが，彫りものをした手すりがついていて，影をつくる角（かど）のある階段の上えのび，そして，途中の広い窓のところでとまっていたが，その窓じきいの下には燕が巣くい，4月の末には，それを越して，青空を背景に，古い梨の木の花が見え，秋になると，その窓の下に，ごろごろ落ちた実のつゆのにおいが，とてもさわやかだった。

——というような「古い家」“the old house”の中に，Hearn のいわゆる“a widowed mother”と，ただふたりきりで住んでいる。……

彼は，毎日，その下に鳥籠の吊してある窓べにすわった。そして母は，彼に読むことを教えたが，そのすらすら習って，すぐおぼえるのに驚いた。ふたりの上には，ライムの木の小さな花のにおいが，空気をとおして雨のように落ちた。

彼は，古い本棚の中にある本の絵の一枚——フランスの歴史画家 David の描いた Marie Antoinett が刑場にひかれてゆく姿を眺めながら，Goethe のいわゆる Weltschmerz を感じたとあるが，それがすでに死の思いにつながるものである。

（因みに，Weltschmerz は，英語でいえば world-agony，world-pain，であるが，「世界苦」などというより，「世のあわれ」「もののあわれ」に近いようである。Goethe 自身はこのことばを使っていないが，それに相応する内容が，“Werther”などの中に見出される。）

この少年は，ある日ある時，「階段のさけび」“the cry on the stair”を聞くのである。それは，遠い印度で死んだ父の訃報を伝えた年寄った叔母の，「はげしくうちじゅうにひびきわたり，永久に彼の心に打ちこまれた叫び声」であった。これは，「すべてのうちでもっとも鋭く思い出され」，そしてそれは，「どんなに年とった婦人を，再び子供のようにさせるかに思われたことであろうか」と Pater はいっている。

この「階段の叫び」は，Pater 自身の場合にあっては，父ではなくて，祖母の死によってひきおこされたのである。この祖母は，1848年，Pater が9才の時死んだ。Pater の父の死は，それよりも早く，Pater がわずか5才の時である。だから Pater は，ほとんど父を記憶していなかった。——少年時代の Pater が，いち早く，死について思いわずらい始めたのは，当然である。

死はものいはぬ生きものの上にも及んだ。——Florian の家には，貂（てん）ermine のような黒い尾と，花のような顔を持っていた Angora の猫が飼ってあった。それが，

ぶらぶら症（やま）いにかかり，病みほうけたあまり，まったく妙に人間らし

くなり，そして百もちがう表情を持った声を出すようになった。——容態（ようだい）はますます悪化し，しまいには，光線にさえもたえがたく感じはじめた。そしてついに，ある朝，ものすごい苦痛のあと，そのちいさなたましいは，すでに全く病（や）み衰え，今わずかに力なくそれを引きとめていた肉体から，ゆらゆらと消え去っていった。

こうしてついに Florian は，人の世の別離のまぬがれがたいこと，すなわち，「死の恐怖」“the fear of death”を思う。——早く世を去ったおさな児のことを思うごとに，“Hamlet”の中の Leartes のせりふのように，子供の肉体が，墓場の芝生の上に咲く菫の花と化すると考えて，わずかになぐさめを得た。

父の死は，路加伝第14章第14節にある「義（ただ）しき者の甦（よみがえ）り」“resurrection of the just”のことを Florian に考えさせ，父の霊は，Joshua のまぼろしのように，美しい物の具をつけてこの世にとどまり，何らかの方法で彼を護（まも）っていると信じた。

ある夏の日，Florian は，母といっしょに墓地を散歩し，堀り返された子供の墓に出会った。それを見て，子供すら時には死ぬことがあるということを確められ，ますますつのる死に対する恐怖をおぼえた。

またある時，Florian は，開いた窓べにすわっていた。すると，人々の話し声がきこえて，思わずそれに引き入れられた。——

それは，眠れない時刻，ある病気の婦人が，自分のそばに坐っている死者のひとりが，そこから彼女をよびに来たのを見た話であった。そして，そのとぎれとぎれの話から，彼は極めてはっきりと，事実，必ずしもすべての死者が墓地に行ったわけでもないし，また彼らは，見かけのように全くじっとしているわけでもなくて，彼らのもとの家で，秘密に，なかば穏れた生活を送り，夜はまったく自由に，往々，昼間も人の目につくように，部屋から部屋へと出没しているが，その場所で一しょにいる連中に対しては，特に大きな好意を抱いてはいない，というような考えを発展させた。夜通し，その姿は，寝ざめがちな眠りの夢ともうつつともつかぬ間に，彼のそばにすわっていて，朝になっても，全くは去ってしまわなかった。……彼はそれまで，あれほどあわれんでいた死者を，こういうていたらくのために，憎むこともできたくらいだった。後になって，彼は，すべての人人が，悲しい心に描く，あのあわれな，帰宅する亡霊——再来者（revenants）——について，風とと

もに来て叫び，或は力ない手で戸をたたくものとして考え，彼らの叫び声は，風の中に，よりもの凄い内的調べとして，ききわけられると思うようになった。

そして，

宗教的情操，それにひたって彼が育てられて来たあの聖書的思想の体系は，すでに深く彼の心の中に根をおろしたゆううつを和げ，これをおごそかなものにさせ，そして，いわば「活ける望み」"a living hope" をもってのように明るくし得るものとして彼にあらわれた。それ故，彼は，安々と，また，聖なるものへの神秘的嗜慾（しよく）の一種をもって，宗教的印象に身をまかせたのである。

ひいては，彼は宗教的なもののすべて——寺院の燈明や，清らかな水のはいった聖盤などを，宗教的意義は別として，ただその純粋の美のゆえに愛するようにまでなった。Sir Edmund William Gosse (1849-1928) は，Pater が幼時，みずから司祭になって礼拝遊びをするのが好きだったと，"Critical Kit-Kats" (1896) の中でいっている。——「死の瞑想」に耽けるあまり，Pater は死にただちにつながる聖職者のような気持になったのである。

"The Child in the House" は，Florian が 12 才になって，「古い家」を去ってほかの場所に住むための，やはり「別離」で終っている。そしてその「古い家」に対する「郷愁」が，いいようのない pathetic な筆で綴られている。

別離はやがて，現世とのそれにつながらざるを得ない。若くして「物のあわれ」をおぼえ，現身（うつしみ）のはかなさを身にしみて感じた Florian は，長篇 "Marius the Epicurean" の主人公と同じで，とりもなおさず，幼少年時の——つづいて青年期の Pater その人である。実際，Marius の心機を一転させたのも，この「死の瞑想」，すなわち若い友人 Flavian の死とこれに伴う死生観に外ならなかった。

時は Antonius Pius の治世の末期，伊太利 Etruria 州，地中海に臨んだ Venus の岬に抱かれた静かな村の由緒（ゆいしょ）正しい旧家に，Marius は，母の手ひとつに育てられて，もう15, 6才になっている。——その，行動よりも瞑想に耽けりがちである性格といい，a widowed mother とただふたりで，大きな，しかしやや持ちくずした家で送っている生活といい，それらは全くわれわれに，"The Child in the House" と，その主人公 Florian Deleal のことを，思い起させずにはおかない。

Marius は，ある時，熱病をいやさんがため，わが薬師如来のような Æsculapius を祭ってある山寺へ行った。数日の参籠の後，日焼けして健康になって帰ってみると，母の

からだは衰えかかっていたが，その後まもなくこの世を去った。このでき事は，しばらくの間，Marius から日の光を奪った。——Marius もまたFlorian と同じく，少年にしていち早く，「死の瞑想」に耽けらざるを得なくなった。

Marius は郷里を去り，Pisa の学校に通うようになる。——Platon のそれを模倣したといわれるこの学園は，ピサの郊外にあって，名高い修辞学者が校長をしていた。Marius は家庭教師の家に住み，若い奴隷に書物を持たせ，凛（りん）とした様子で通学した。

この学校で，彼の心を誘ったのは，彼より3つ年上の， Flavian という handsome な少年だった。Flavian の父は奴隷であったが，その主人が， この美しい子の前途に嘱目して，彼を学校へ出してくれたのである。

Flavian は，奴隷の子として，およそ Marius とは対しゃ的であった。——始めから無信仰で，ただ自分自身のみを信じ，自己の感覚的な才能のみを信じていた。

彼は，人が早くから成人扱いされる世界で，早くもぜいたくな町の誘惑に身をまかせていた。そしてもう成人のみなりをし，風采を気にし，美食と花とを好んでいた。——要するに，Flavian は Marius にとって，異教世界の象徴であり，縮図であった。

人は反対のものを好むのを常とする。——Marius は入学のそもそものはじめから，この彼と全く性行を異にする Flavian の目に好意を感じ，またその文学的才能にあっとうされた。そしてこのふたりの間には，純粋で無私の友情が成熟していった。

Flavian によって文学の感受性をよびさまされた Marius は， 羅典文学末期の名華，Apuleius の「黄金の驢馬」中，“Amor et Psyche”の物語を， 納屋の乾草の積み重ねの上で，西日を受けながら，友と共に読みふけるのである。それは，白檀のかおりをしみこませ，巻物の両端は，彫刻を施し，金箔を押した象牙の軸頭で飾られてあった。この優婉たぐいない愛の物語は，彼にもののあわれを感じる心をめざまし，美——特に人間の美が最高で，美しい身体はも早物質でなく，聖らかな精霊でさえもあるかのように思わせた。

当時伊太利には疫病が流行し，Flavian もこれに感染して床についた。Marius は，病気の進行する徴候をつぶさに見つめながら，看護に献身している。Flavian のからだは熱にうかされているが，今，ばらの花の匂う中に，息も絶え絶えに横たわりながら，羅典語の結婚歌を Marius に口授する。……

灯影（ほかげ）は病人をなやますように思われた。終日山の間で鳴っていた雷は，Flavian にとって心地よくなくもない暑熱を伴っていたが， 夜になると地雨

（じあめ）となった。そして，Marius はまっくらい中で，今や突然おそった悪寒（おかん）のためにかすかにふるえている病人のそばにすわり，それを恐れて，他人がこの家の傍を通りさえもしなかった感染などはものともせず，わが身のあたたかみを Flavian に与えようとした。ついに明方近く，Marius は，病人のいまわの努力があらわれて，それと共に，意識がはっきり戻ってきたため，病人に，自分がそのかたわらにいることがわかった，ということを知った（明るくもあったけれど，Marius には，こういうことが，病人に触れていてわかったのだ）。その時 Marius はささやいた，「時時君をたずねて泣くとしたら慰めになるか？」「君がそこにいることが判り，君が泣いているのを聞かない限り，それが何になる！」

この Flavian の死の床のことばこそ，今まで素直に育ってきた Marius の心を，たちまち幽暗の淵へ投げこんだ。

Flavian 今や亡し！　遺骸をおさめた小さな大理石の箱は，枯れかかった花の間に，埃と涙とにまみれて，冷たく横たわっている。ほとんどの人々は，他人の死に出会うと，霊が他界へ移って生きるという信仰を強めるものであるが，Marius にとって Flavian の死は，霊の消滅を暗示する以外の，何ものでもないように感じられた。おそらく友の生命は，火葬の炎とともに，あとかたもなく消え失せるのであろう，Hadrianus 皇帝の臨終の歌にあるように。

そこで Marius は，昔の哲人達が，この不可思議な生命について，何といっているかを知ろうとする好奇心に駆られる。しかし，その家とも偶然の住みかともいうべき肉体と，全く没交渉に存在する純粋な霊（pure soul）について説く Platon 主義者の「天上の秘密」(arcana cœlestia) を信じることができなかった。そして一心に，Epicurus, Lucretius, Herakleitus の哲学を究め，何かこの死生の問題を解釈するに足るものを求めた。

こうして Marius は，

> Epicurus から，Lucretius の雷鳴と稲妻——ばら園で，人が寝ころびながら楽しむかも知れない，相当遠い雷鳴と稲妻のような——から，ある意味で，両者の師だった Ionia の Heraclitus にまでさかのぼっていった。

Heraclitus の「万法流転」の説が，Pater そのひとに深い感銘を与え，有名な「文芸復興論集」の「結論」“Conclusion” は，この説を標語としていること，人の知る通りである。

Marius は，特に，Socrates の弟子だった Cyrene の Aristippus が，ギリシャの植民地であるアフリカの高原で説いた快楽説に心ひかれた。そして，ついに，新 Cyrenism ともいうべき一種の快楽説，Epicureanism を奉じるにいたるのであるが，その動機は，全く，「Flavian の死につづいておこったこころの激動」“the agitation which followed the death of Flavian” であった。

Marius への Aristippus の影響は，とりもなおさず Pater へのそれである。“Marius the Epicurean” 第2部第8章 “Animula Vagula”（さまよう小さなたましい）を読めば，人はあまりにもしばしば，Pater に帰趨する思想のあらわれているのにおどろくであろう。殊に，

> 存在しなくなった過去と，決してこないかも知れない未来との間に，現在の瞬間という小さな点のみがあるという，単に抽象的な，懐疑的な理解が，Marius にとっては，できるだけ，悔恨と欲求とにふけることをさけて，絶対自由な精神をもって，現在の改善に努めようとする決意として，実行的なものとなった。

という一節のごときは，すなわち，「結論」の思想そのものである。

後に Maius は，哲学皇帝といわれた Marcus Aurelius の秘書官となる。そして，たまたま，その近衛の軍人でキリスト教徒だった Cornelius と知り合う。

皇帝 Aurelius は，Danube のかなた，アルプス方面を指して遠征の軍についた。羅馬はあるじのいない家のように寂しかったが，Marius は leisure を得ることができた。彼はそこここの丘を逍遥し，以前にもましてつきつめた態度で，読書し，かつ瞑想した。熱烈な恋愛もせず，激しい世俗的な野心も抱かなかった彼が，友のほかなる友，彼のほかなる彼を考えて，無常の世に処するなぐさめを得ようとしたのは，この頃であった。——

> Flavian をのぞき，Cornelius さえものぞいて，熱心な友情にもかかわらず，なおかつすべてのものにも増して彼が愛したであろう孤独を通して——ひとりの友，不断の友が，いつも変らず彼のかたわらにいて，路傍のばらの花を眺める喜びを倍にしてくれ，彼の気むずかしさやゆううつにたえてくれた。

Marius は，これまで，万法の流転，諸行の無常，人の世の短かくはかないことに思いわずらい，ともすれば現実の喜びも，いいようのないやる瀬なさに圧倒されることがあった。が，今は，この悠久で普遍的なものを想起し，それに一切の哀歓を托したい気持になった。そしてついに，あの「理想」——旧約には「創造者」ととなえ，ギリシャ

の哲学者は「永遠の理性」といい，新約には「人類の父」と呼ぶ理想の存在を信じるようになった。

ところが哲学皇帝は，当時ようやくその数を増しつつあったキリスト教徒を迫害しはじめた。そのため Marius は，皇帝に対して不信を抱いて官を辞し，永遠に羅馬を去るつもりで，故郷に帰った。その時 Cornelius がたずねてきた。ふたりはいっしょにあたりを散歩し，夕まぐれ，共に殉教者の墓をおとずれた。そのため，Marius と Cornelius は逮捕されて，宗教裁判を受けるため，羅馬へ護送されることになった。

ところが，他にも同様な目にあったもののうち，ひとり，キリスト教徒でないものがいるということがわかったので，Marius は財産をさし出し，賄賂（わいろ）とし，わが友こそそのひとりであるといって，Corelius を放免させた。——Marius が Cornelius の身代りになろうとしたのは，Cornelius がある女性と結婚することを知っていたからである。

Marius の配慮を全く知らない友が去ってから，Marius は，秋雨にぬれながら羅馬へ護送される途中，熱病のために死にかけたので遺棄された。そして，ひそかに，貧しいキリスト教徒の家に伴なわれ，その親身の看護を受けながら，ちょうど殉教者そのもののようにこの世を去った。——その死はあまりにもあわれでわびしい。しかし Marius，ひいては Pater そのひとが，経験を重んじ，感覚をたっとび，あらゆる理法に対して懐疑の見地に立ちながら，その目は，「天の一方に」明かなひとつの星影を見失しなわなかったことによって，われわれ読者は救われた気になる。

「文芸復興論集」の結論に盛られた彼の人生観の哲学も，また「死の瞑想」から出発した。——哲学の総合力を疑い，理法の権威を信じなかったとも見える Pater も，ひとつの真理を否定することはできなかった。それは Heraclitus の「万法流転」(Panta rhei) の事実である。彼は「結論」の標題の下に，この文句を含む Platon の「対話篇」"Clatylus" のことばを引用している。が，「万法流転」はあくまでも事実であって，思想そのものではない。Paterは，ただこの事実を凝視したばかりでなく，この流転の世に処する意義方法を究めずにはおられなかった。

「万法流転」はすなわち「諸行無常」である。しかし，もし諸行の無常を認めることが，宇宙人生に対する最終的見解であるとすれば，その思索たるや絶望に近い。いわゆる厭離穢土（おんりえど），出離往生は，わが法然，親鸞の専修念仏の思想であるが，それはあまりにも退嬰的，消極的——むしろ自殺的であった。Pater の著作を通じてみ

ると，確かに無常観から出発した「死の瞑想」が，いちじるしい特徴になってはいるが，Pater が死を想うのは，決して頽廃的な心ではなくて，むしろ，死を凝視することにより，人生のはかなく短いことを痛感し，そうしてそのはかなく短い一生を，できるだけ豊かに深くいとなもうとする，いわば，現世善処，現在利用といっていい，積極的な，厳粛聰明な態度からであった。

だから彼は，この永遠の一瞬間，流れて止まぬ生涯において，

常に，この強い，宝石のような炎をもって燃え，この恍惚を持続することが，人生における成功である。

といっている。

こうして，「結論」もついにまた，死の凝視，「死の瞑想」で終っている。——彼は，Victor Hugo の小説「死刑囚最後の日」（Le Dernier Jour d'un Condamné）の中の，「人は皆死刑を宣告されている，ただ期限不定の執行猶予があるばかり」ということばを引用して，

世にあるは束の間，やがていずこへか行ってしまう。あるものはこの束の間をうかうかと過ごし，あるものは盛んな情熱に費し，少くとも「この世の子」の中で最も賢いものは，芸術と詩歌とに費す。

と結んでいる。

われわれ日本人がここを読む度に，いつも思い出されるのは，「つれづれ草」第49段である。

老（おい）来りて，始めて道を行ぜんと待つことなかれ。古き塚，多くはこれ少年の人なり。はからざるに病を受けて，たちまちにこの世を去らんとする時にこそ，はじめて過ぎぬる方の誤れることは知らるなれ。あやまりというは，他のことにあらず，すみやかにすべきことをゆるくし，ゆるくすべきことをいそぎて，過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかいあらんや，人はただ無常の身にせまりぬることを，心にひしとかけて，つかのまも忘るまじきなり，さらば，などか，此の世の濁りもうすく，仏道をつとむる心もまめやかならざらん。……

Pater は，芸術詩歌に高い位置を与えているのに，法師である兼好は仏道を説いている違いこそあれ，無常をひしとに心かけて，つかの間も忘れず精進せよという，死生観から出発した倫理観は，全く同一である。